令和　６年　６月１９日

国土交通省九州地方整備局
八代河川国道事務所長
　　　飯島　直己　様

日本野鳥の会熊本県支部
支部長　田中忠
日本野鳥の会熊本県支部長印

人吉市の鳥「ヤマセミ」の生息環境保全について（要望）

日頃より球磨川を中心とした河川行政と野鳥生息地の保全をはじめとする環境行政に取り組んでいただいていますことに感謝申し上げます。

さて、平成２９年３月「人吉市の鳥」に追加指定された「ヤマセミ」*Megaceryle lugubris*は、ブッポウソウ目、カワセミ科の水鳥で、日本全国でも減少傾向にある希少な野鳥です。

九州以北の山麓から山地の渓流に一年を通して生息し、水中に急降下してハエ（オイカワ）やイダ（ウグイ）などの魚を捕って生活するハトくらいの大きさの野鳥です。水鳥の中では食物連鎖の最上位に位置し、環境の豊かさを示す指標となる重要な野鳥です。１つがいのなわばりは、一般的に河川を中心に７ｋｍくらいとされています。繁殖活動だけを観ても、１１月から翌年に向けた巣穴確保を始め、年をまたいで３月までに巣穴の仕上げをします。その後抱卵に入り、ふ化が４月から５月です。育雛を終えて６月ごろに巣立ったヒナたちには、エサの取り方や外敵からの身の守り方などの教育を８月くらいまで続けます。野鳥の視力は人間の６倍とも言われ、周囲の動きや音にも敏感に反応します。特にヤマセミは警戒心の強い野鳥です。

令和２年に発生した豪雨災害前までは、人吉市では人々の生活圏の中で頻繁にヤマセミが観察され、子育てもしていました。そのことは、人吉市在住の会員を中心に２０名ほどの協力を得た２００９年～２０２０年までの１２年間に及ぶ調査で明らかにされています。その結果を簡単に示した図が資料１です。球磨川を中心とした人吉市だけで、なんと３つがいもの繁殖エリアがあります。しかも、Ａ，Ｂ，Ｃのエリアは３ｋｍ～５ｋｍの狭い範囲であり、そこで子育てがなされていることは、人吉市における球磨川の自然がいかに豊かであるかを示しています。人口３万人あまりの市でありながら、静かな清流の中で相良藩の歴史と文化を大切にした小京都としてのよき街中に、ヤマセミが人々と身近に共存して暮らす姿はとても稀なことです。資料２　全市民の宝である球磨川を中心としたこの共存の姿は、全国に誇れるものであり、世界中に発信できる姿でもあります。そこで人吉市には、「ヤマセミと共生する日本一の街づくり」をお願いしています。

しかし豪雨災害後の自然環境は、４年が経過しようとしても未だ元に戻っていないようで、残念なことにヤマセミの姿は時々観察されるだけの現状です。災害後の復旧と復興に向けた工事が急がれる中で、水系の変化等もあってエサ資源が安定して復旧しない現状や工事にともなう騒音等も特に野鳥には影響しているものと考えます。ヤマセ

ミについてはA, B, Cの３エリアともに左岸側が主な営巣地となっていますが、特にBとCのエリアは河川沿いの崖を営巣地としていてとても近い距離です。

つきましては、ヤマセミをはじめとする野鳥たちのさらなる自然環境保全と、人々の生活が自然環境にこれ以上負荷をかけることがないように行政として監視と指導をしていただき、未来をつくる子どもたちや市民のために、以下のことをお願いします。

記

① 行政各所の全職員が、人吉市の鳥であるヤマセミについての生態と現状への知見を共有し、今後も環境保全をめざした配慮ある河川行政に努めてください。

② 重要な災害復興工事を推進しながらも、特に球磨川左岸は騒音だけでも繁殖活動への影響が危惧され、工事による騒音や接近等には十分な配慮をしてください。

③ 漁業協同組合などと連携して、エサとなる魚の資源量の回復についてモニタリング調査を実施するなど、できるだけ早期の資源回復に努めてください。

④ 球磨川は海や湖と違い川幅が狭く、水上バイクや騒音を発するボートなどの使用は音の跳ね返りが強く、ヤマセミの繁殖活動の放棄につながります。また学生のカヌーや歴史ある川下り船などとの衝突事故なども危惧され、安全面からも行政として監視と指導を徹底してください。

⑤ 未来をつくる子どもたちや市民にもわかりやすい、ヤマセミをはじめとした水鳥たちと水環境保全等の案内板を設置してください。

以上

資料１

ヤマセミの繁殖エリア図（2009年～2020年調査）

豊かな自然あるからこそ

KUMAMOTO とりさんぽ

随時掲載

球磨川にたくさんの野鳥

山や丘に囲まれた人吉盆地は、相良藩の町並みが残る小京都の風情の中に日本三大急流の清流球磨川が流れ、国宝「青井阿蘇神社」が1200年を超す歴史を積み上げています。

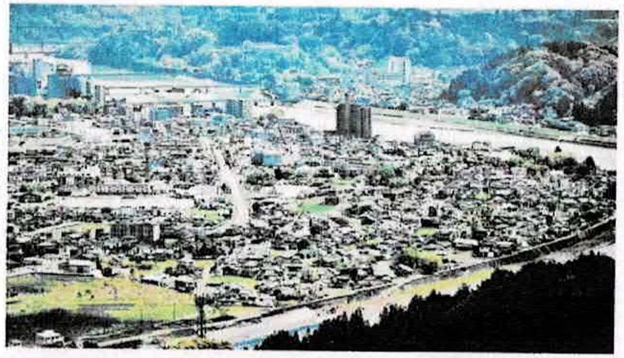
ふるさとに帰り城跡の石垣を映した穏やかな流れの川面に目をやると、ツバメが飛び交い、空中の小さな虫を捕らえていました。空中生活に適した口ばしは横に広く、足は短くて飛ぶときは飛行機のように格納できます。子育て真っ最中の野鳥たちは、餌をとっては何度も巣に運んでヒナを育てます。下流に歩みを進めると、ゴーゴーと音を立てる流れは速くなり水しぶきがあがります。

すると浅くなった流れの瀬に、ハトより大きなヤマセミが豪快に突っ込みました。なんと20㌢くらいのハエ（オイカワ）を捕らえ、大きなくちばしに挟んだ魚を右へ左へと石に打ちつけたあと、巣の方へと飛び去って行きました。多くの人々が生活する街中で共に生きるヤマセミの姿はとても貴重で、自然環境が豊かであるからこその光景です。

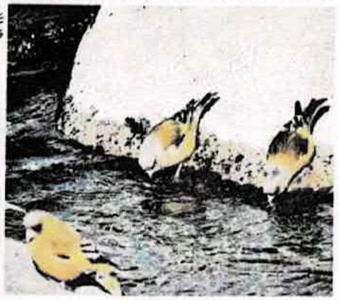
石が集まった中州では、カワラヒワが草の種をついばんでいました。体はスズメくらいの大きさで、飛ぶと翼の黄色が美しく、短い口ばしは丸くとがって硬い種子でも割ってしまいます。しばらくすると喉が渇いたようで、水を飲み始めました。まさに河原にいるヒワの姿にしばし見とれました。

その後ろをチョコチョコとスズメより大きなイカルチドリが足早に駆けぬけました。県内の大きな川でも中流域に生息するチドリですが、限られた場所でしか出合えません。小石の間に卵を産んで子育てをしますが、近年は豪雨で急に増水すると卵が流される悲劇もおきています。城跡の下流側に立っている歌碑には「かわちどり　鳴けば見おろす球磨川の　瀬の音たかし霧のそこより」と彫られています。おそらく冬もこの地に生息するイカルチドリのことだと思います。実は、人吉の冬は日本で一番霧が発生することでも有名です。私が子どものころは、霧の街である「日本のロンドン」と言っていたことを思い出しました。

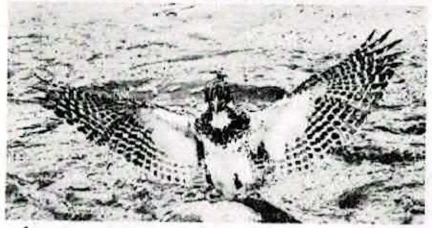
さて、2020年の熊本豪雨ではJRの線路も流され、肥薩線の「特急かわせみやませみ」号も運行できなくなりました。人吉市の鳥はヤマセミ、八代市の鳥はカワセミに指定され、市民からも愛されています。一歩ずつの歩みでしょうが一日も早い復興を心から願います。（日本野鳥の会県支部長・田中忠）


球磨川が流れる人吉市街

大きな口で餌をまつツバメのヒナたち


水辺で水を飲むカワラヒワ

球磨川の中流域で生活するイカルチドリ


▲人吉市の市鳥ヤマセミ

学びの止まり木

ヒナを拾わないで

ほとんどの野鳥は、巣立った後も親鳥と一緒に行動します。巣立ち直後は上手に飛べずに地面に落ちることもあります。そこに私たちが出くわすと、かわいそうと思いがちです。じつは親鳥が近くで見守っているのですが、気づかないでうっかり手をだすとヒナを誘拐することになります。野鳥の会では「ヒナを拾わないで」をスローガンに、できるだけ見守ってもらうお願いをしています。数日たつと上手に飛びまわり、親から餌の取り方や身の守り方などを学びながら成長していきます。私たちもそうですが、いろいろな体験を通して学ぶことは大切です。

私は2020年7月4日の熊本豪雨の時に、家ごと流される恐怖に襲われて避難所に駆け込みました。その日は人吉の実家で、水かさが増す川の様子を窓越しに見ていたのですが、目の前で荒れ狂う高波となった激流は、日頃ヤマセミの雄姿を楽しんでいた対岸の大木をのみ込み流しさりました。小学生のころから川で釣りなどをして遊んだ私は、少し水量が増えただけでも身動きがとれなくなる怖さを体験して知っていました。みなさんもいろいろな体験を通して学び「大切な自分の命は、自分で守る」ことを親子で実践してください。